

一橋  
009

# 推 問

## 学校推薦型選抜（経済学部）

令和 7 年 度

### 注 意 事 項

1. 「解答はじめ」というまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. 問題は1冊（本文7ページ）、解答用紙、下書用紙はともに3枚である。
3. 全部の解答用紙に受験番号を書くこと。受験番号は、次の要領で明確に記入すること。

(例) 受験番号 80001 番の場合 → 

8	0	0	0	0	1
---	---	---	---	---	---

4. 解答は解答用紙の所定の位置に横書きで書くこと。他の所に書くと無効になることがある。

また、字数などの指示がある場合は、その指示に従って書くこと。なお、字数制限がある場合、算用数字及びアルファベットに限り、1マスに2文字入れることができる。それ以外の句読点や問題番号には1マスを使用すること。問題番号も字数制限の中を含む。ただし、例えば「問1」ならば「1」とのみ書いても構わない。

(例) 「問1」の場合 → 

5					
1	.	.	.	.	.

5. 書き損じても、代わりの用紙は交付しない。
6. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ること。

令和7（2025）年度一橋大学 学校推薦型選抜 経済学部 小論文

以下の文章と図表を参照して、以下の設問に答えなさい。

問1 購買力平価説と金利平価説とは何か。文章に即して400字以内で答えなさい。

問2 ビッグマックの価格をみる限り、図表1にあるように購買力平価説が成り立っていないように見受けられる。その要因として、どのようなものが考えられるか。200字以内で説明しなさい。

問3 図表3の実質実効為替レートは円安になっている一方で、図表4の日本の貿易収支は赤字になっている。この両者を結び付けると、日本の輸出競争力はどうなっているのか。あなたの考えを400字以内で述べなさい。

問4 金利平価説に従うと、今後、円ドルレートはどのような推移を辿るのだろうか。あなたの考えを400字以内で述べなさい。

齊藤誠 (2021) 『教養としてのグローバル経済』 (有斐閣) 抜粋

(出題のために改変した箇所がある)

## 円と外貨の両替

海外からモノを輸入するときにも、外国の株式に投資するときにも、外国に旅行するときにも、外国の通貨 (外貨) を必要とする。日本に住む人が外貨を得るためには、日本の通貨である円を外貨に両替しなければならない。

逆に、日本の企業に対して海外に輸出したモノの代金が外貨で支払われた場合、受け取った外貨を、円に両替する必要がある。外国から送金されてきた外貨も、日本国内で使用するためには円に両替する必要がある。

このように、日本に住む人々が海外に住む人々と経済取引をしていくためには、円から外貨への、あるいは外貨から円への両替が必要不可欠となってくる。

## 外国為替相場とは？

それぞれの国の経済活動は、その国の通貨を用いて行われている。日本であれば円、アメリカであればドル、イギリスであればポンド、中国であれば元 (日本ではゲンと発音されるが、中国ではユアンと発音される)、韓国であればウォンという通貨単位を用いている。

財やサービスの貿易においても、たとえば、日本の製品がアメリカに輸出される場合、日本国内ではその製品価格が円表示であるが、アメリカ国内ではその製品価格をドル表示に換算しなければならない。

また、日本からアメリカへ資金を送金する場合、送金の仲介にあたる銀行は、円資金をドル資金に両替しなければならない。

このように2つの通貨の換算や両替に必要となってくる交換レートが外国為替相場である。アメリカ以外の国では、外国為替相場は、相手国の通貨1単位当たりの自国通貨の交換レートで表示される。たとえば、円とドルの交換レートは、「1ドルが円でいくらになるのか」で表示される。たとえば、2020年5月20日は、1ドルが108円に相当した。

ドルと円の交換レートが1ドル当たりの円で表されているので、レートが上昇するとドル高円安、レートが低下するとドル安円高を意味する。たとえば、1ドルが100円から120円になると、それまで100円で買っていた1ドルが120円になったので、ドルが高くなって円が安くなっている。逆に、1ドルが100円から80円になると、これまで100円だった1ドルが80円で買えるようになるので、ドルが安くなって円が高くなっている。

### 購買力平価から決まる外国為替相場

それでは、外国為替相場は、どのようにして決まるのであろうか。外国為替相場の決定については、主として購買力平価から決まるという考え方と金利平価から決まるという考え方がある。

購買力平価では、どの国の製品でも、同じものであれば、同じ通貨に換算した価格も同じであると考えられる。なお、外国で売られている同じ製品の価格を自国通貨に換算すると、自国の製品の価格と同じになる状態は、一物一価といわれている。

たとえば、マクドナルドのビッグマックがアメリカで4ドル、日本で400円とする。この場合、円ドルレートが1ドル100円であれば、アメリカのビッグマックも円換算で400円(=100円/ドル×4ドル)となって、日本のビッグマックの値段と同じになる。ここでは、1ドル100円の円ドルレートが購買力平価となる。

したがって、購買力平価は以下のように求めることができる。

$$\begin{aligned} \text{購買力平価 (円/ドル)} &= \text{日本のビッグマックの値段 (円)} \\ &\div \text{アメリカのビッグマックの値段 (ドル)} \end{aligned}$$

それでは、実際の円ドルレートはビッグマック価格で見た購買力平価どおりに決まっているのであろうか。図表1は、2000年から5年ごとにアメリカと日本のビッグマックの価格をまとめたものである。表の④の列には上の式に従って求めた購買力平価を、表の③の列には実際の円ドルレートを示している。

購買力平価と実際の円ドルレートは、2010年7月でほぼ一致している。しかし、2005年6月、15年7月、20年1月では、実際の円ドルレートは購買力平価に比べてかなりドル高円安である。逆に、2000年4月は、実際の円ドルレートが購買力平価に比べてドル安円高である。

## 外国為替相場と輸出競争力

どうも、実際の円ドルレートは、購買力平価どおりに決まっているわけではなさそうである。しかし、購買力平価と実際の円ドルレートを比較することには大きな意味がある。

たとえば、2020年1月には、実際の円ドルレート(110円/ドル)が購買力平価(69円/ドル)に比べてかなりドル高円安であった。日本のビッグマックの値段390円は、実際の円ドルレート1ドル110円で換算すると3.55ドルとなる。すなわち、ドル通貨で換算すると、同じビッグマックが、アメリカでは5.67ドルもするのに、日本では3.55ドルである。

日本製のビッグマックは、仮にアメリカに輸出すれば、アメリカ製のビッグマックよりもかなり安く販売できる。言い換えると、日本製のビッグマックは輸出競争力が非常に高い。同じことが実際の日本の輸出製品に起きれば、同じ製品が安い分だけ日本製品がアメリカ製品に比べて輸出競争力を持つことになるであろう。

このように、実際の円ドルレートが購買力平価よりもドル高円安である状態は、日本の輸出製品を海外市場でそのぶん安く売ることができ、価格競争力を持っている状態なのである。

## 金利平価から決まる外国為替相場

購買力平価は、円ドルレートが日本とアメリカの物価(たとえば、ビッグマックの価格)の比較で決まってくる。一方、これから紹介する金利平価は、円ドルレートが日本とアメリカの金利の比較で決まってくる。

国境を越えて自由に移動する資金(資本)は、金利が相対的に高い方へ向かう傾向がある。たとえば、日本の金利が低く、アメリカの金利が高くなると、資金は、日本よりもアメリカの方へ流れていく。その結果、円を売ってドルを買う動きが強まって、ドル高円安となる。

日本の金利↓ アメリカの金利↑ ⇒ ドル高円安

逆に、日本の金利が高く、アメリカの金利が低くなると、資金は、アメリカよりも日本の方へ流れていく。その結果、ドルを売って円を買う動きが強まって、ドル安円高となる。

日本の金利↑ アメリカの金利↓ ⇒ ドル安円高

金利平価の金利には、国が10年以上にわたって返済を行う債券である長期国債の金利を用いることが多い。アメリカと日本の長期国債金利の比較は、以下のような金利格差を用いる。

#### アメリカと日本の長期国債の金利格差

$$= \text{アメリカの長期国債金利} - \text{日本の長期国債金利}$$

#### 金利平価から見た実際の円ドルレート

実際の外国為替相場は、本当に金利平価によって決まってくるのであろうか。

上で見てきたように、アメリカの長期国債金利が日本の長期国債金利よりも上昇して両国の金利格差が拡大すると、ドル高円安傾向が生まれる。逆に、両国の金利格差が縮小すると（アメリカの長期国債金利が日本の長期国債金利よりも大きく低下すると）、ドル安円高傾向が生まれる。

図表2は、1990年1月から2024年6月の期間について両国の金利格差（細線）と円ドルレート（太線）の推移を見たものである。

金利平価によって外国為替相場が決まっているとすると、両国の金利格差と円ドルレートは同じ方向に動くはずである。そうした傾向は、2000年から2018年にかけておおむね確認できる。すなわち、金利格差が拡大（縮小）すると、ドル高円安（ドル安円高）の方向に向かう。

しかしながら、金利平価が妥当しない期間も少なくない。図表2から明らかなように、1990年代、とくに、1990年代前半は、金利格差が拡大する局面でドル安円高が進行することがしばしば観察された。また、2019年は、アメリカの長期国債金利が急激に低下して金利格差が縮小したにもかかわらず、ドル安円高とはならなかった。

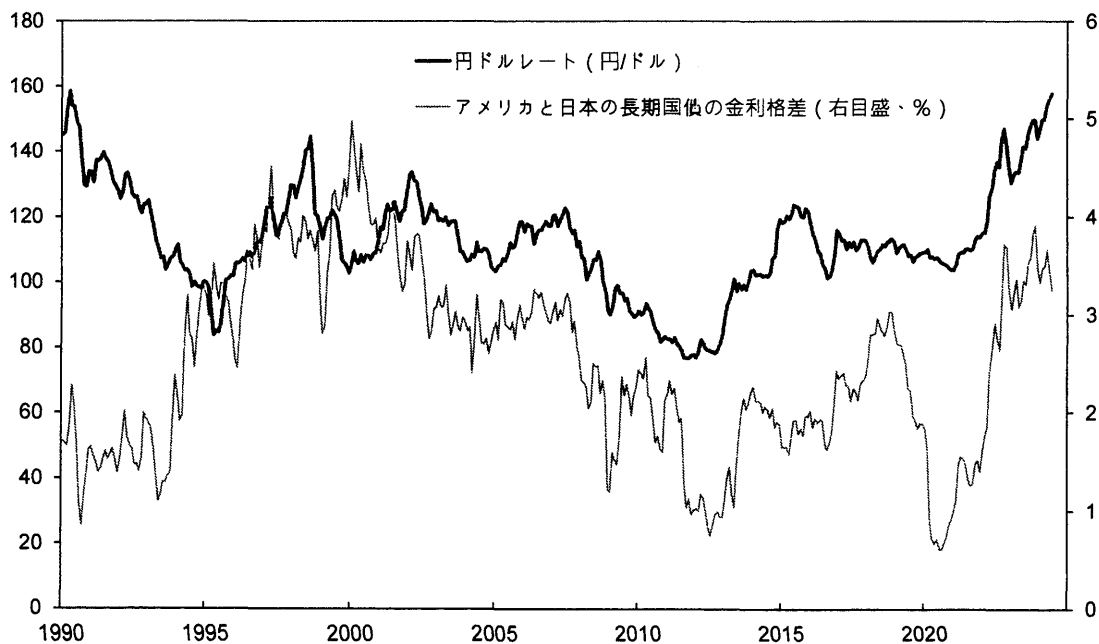
購買力平価のケースと同じように、金利平価だけで外国為替相場が決まらない時期も決して少なくない。しかし、購買力平価も、金利平価も、長期的な変化や今後の動向について見通しを持つためには重要である。

図表1：アメリカと日本のビッグマックの価格から見た円ドルレート

	① アメリカでのビッグマックの価格 (ドル)	② 日本でのビッグマックの価格 (円)	③ 実際の円ドルレート (円/ドル)	④ ビッグマック価格で見た購買力平価 (円/ドル)
2000年4月	2.51	294	106	117
2005年6月	3.06	250	107	82
2010年7月	3.73	320	87	86
2015年7月	4.79	370	124	77
2020年1月	5.67	390	110	69
2024年1月	5.69	450	148	79

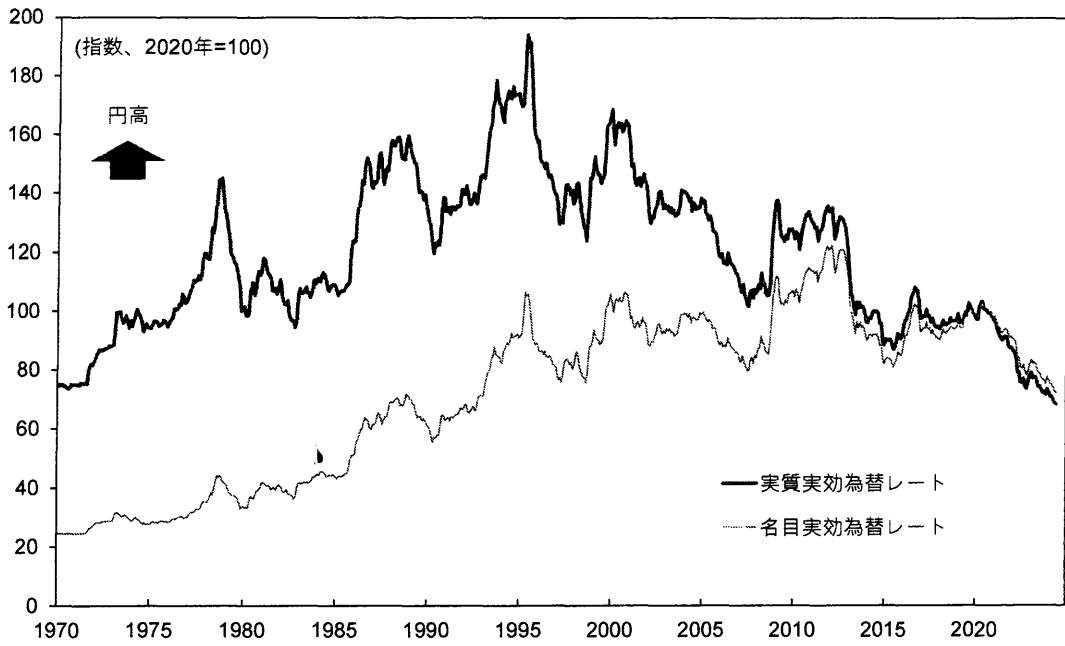
計算方法：④は、①を②で割ったものである。出典：The Economist

図表2：円ドルレートとアメリカ・日本の長期国債の金利格差



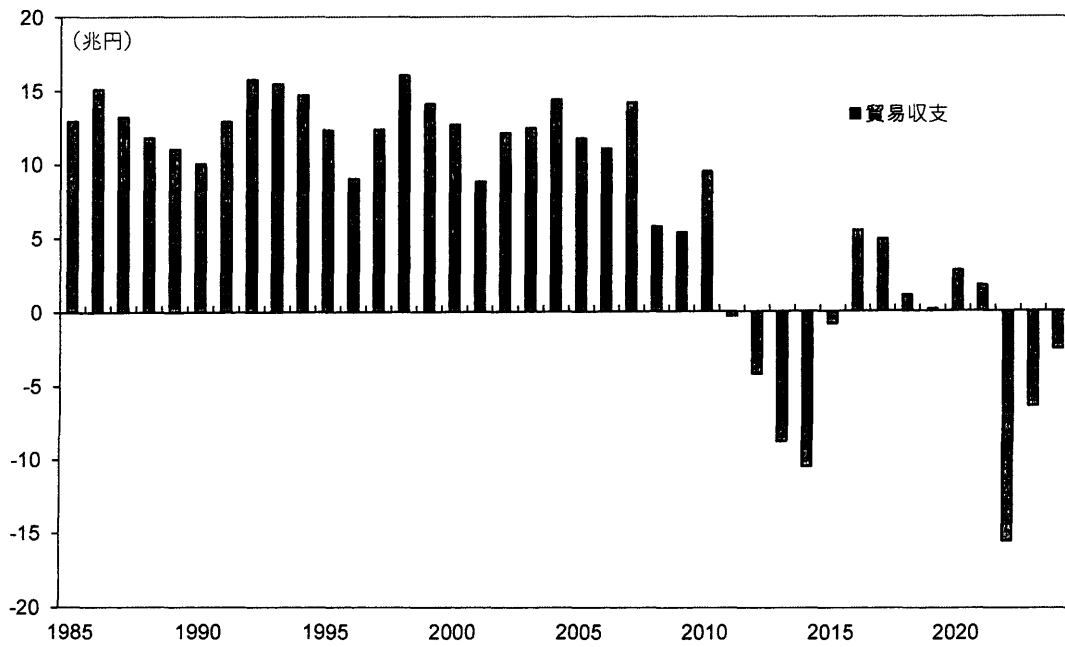
出典：FRED

図表 3：名目実効為替レートと実質実効為替レート



出典：日本銀行

図表 4：貿易収支



出典：日本銀行